

森の石松は三州掘切の生まれ

石松の故郷 富岡 伊田良種



はじめに

「秋葉路や花橘も茶の香り 流れも清き太田川
若鮎おどる頃となり 松の緑のいろさえて 遠州
森町良い茶の出處 娘やりたやお茶摘みに ここ
も名代の火伏せの神 秋葉神社の参道に 産声あ
げし快男児 昭和の御代まで名を残す 遠州森の
石松……」義侠伝の一節、森町茶業青年研究会、
島房太郎会長の作った枕詞である。

昭和の初期、講釈師神田伯山の講談や、当時浪
曲会の人気ナンバーワンと言われた広沢虎造師の
名調子にのり、口演やレコード・ラジオ等によっ
て森町のお茶と侠客『森の石松』の名は、全国に
風靡するに至った。

浪曲や講談では、石松は森町の出身とされてい
るが、果たしてそうであろうか、神田伯山は石松
の森町生まれを最後まで通しているが、おそらく
森町、飯田出身の作家、村松梢風の創作と思われ
るのだが？……

森町の郷土史家、大隅信好氏は「石松が森町出
身であることを証明する資料は、何一つ残ってい
ないが、石松は森町の恩人である。

石松のお蔭で森町のお茶は一段と声価を高めた
し、観光森町は脚光を浴びる事になった」……と
郷土誌、『三木の里』に書いている。

以前（平成6年8月19日）、森町観光協会の一
行が石松の史跡探訪で富岡の洞雲寺を訪れた際、
案内に同席した私が、会長の山下和男氏に尋ね
た、「貴方は、石松が森町の生まれと信じておら
れるか」と、そのご返事は「思っていない、三
河の生まれと聞いている」と言われた。

1. 石松の生い立ち

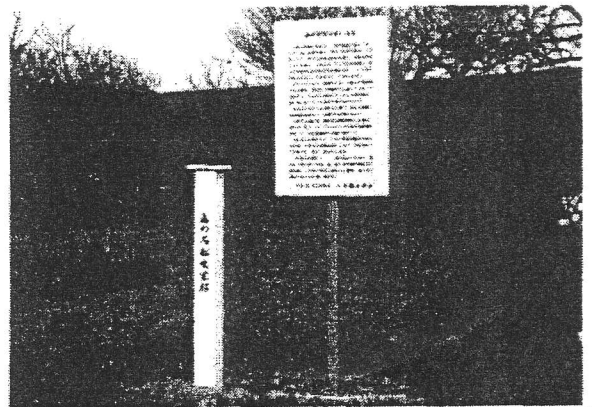
私が少年の頃、地元掘切の植村栄吉（昭和43年
2月2日没、92歳）さんや土地の古老から聞かさ
れていた「石松」の生家山本家は、当時三河国八
名郡半原村掘切（現、新城市富岡宇掘切平）で私

の家から300メートル程の所にある。私が子供の
頃は、掘切にも幼な友達がいる、付近一帯は私た
ちの遊び場で、当時（昭和の初期）屋敷内にはま
だ古びた納屋が残っていたのを覚えている。

屋敷跡も約1反歩（10アール）もある広さで現
在は農地で栗畑となっているが、当時、山本家で
使用していた井戸だけは今も残っている。

山本家の先祖は、信州諏訪藩の藩士であったが
何らかの理由により主家を浪人して、三河の掘切
で百姓となった。

百姓と言っても名字帯刀を許された郷士で、
代々、山本莊次郎を名乗り、名主、庄屋を勤めて
いた家柄で、洞雲寺境内にある山本家先祖の墓地
には立派な墓碑も立ち並んでいる。

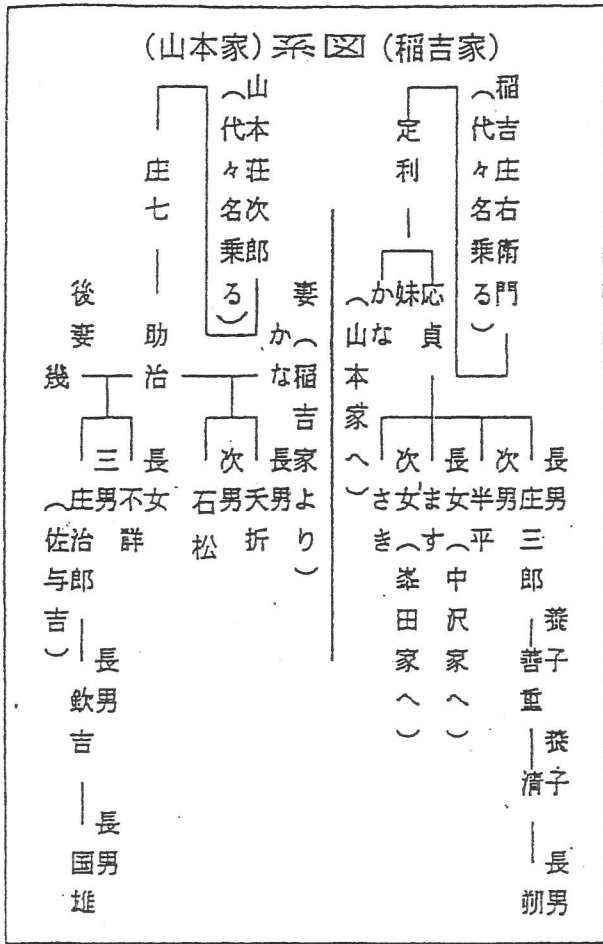


森の石松生家跡（富岡掘切）

石松の母『かな』の実家、稲吉家は三河国設楽
郡作手郷大和田村（現、新城市作手大和田）
の郷士で、元は武士、代々、稲吉庄右衛門を名乗
り、大和田村の開祖である。

『かな』は文武両道の達人、稲吉庄右衛門応貞
の妹で、山本、稲吉の両家とも地方の名望家であ
り、似合いの家柄という訳で世話をする人があつ
て『助治』のもとへ嫁いできた。

そして二人の間に生まれた長男は夭折したが、
続いて次男の『石松』が生まれた。



2. 呪われた運命

山本家には、屋敷の西北隅の小高い所に諏訪明神の分神を勧請し、内神様として祀ってあったが父、助治の代になってから、この内神様を請われる儘に伊勢の人に譲ってしまったのが運のつき。それからの山本家は不連続きで、火災に遇うなど衰退の一途を辿り、三度目の火事では石松の母、「かな」と飼っていた馬まで焼け死んでいる。

たび重なる不幸に見舞われた助治は、知らぬ他国へ行って、この苦境を乗り切り家の再興を図ろうと、自分の土地を近所の人に預け、幼い石松を連れて遠州森町方面の山へ炭焼きの出稼ぎに出掛ける事となった。

それからの石松は、炭窯や山小屋の付近で一人遊びをしており、石松が7歳の頃、森町の天宮神社祭礼の花火や太鼓の音に誘われて山を下り、祭り見物に出掛け、混雑に紛れて迷い子となり、泣いている所を森の五郎親分がを見つけ、ひきとる事になった。父親の助治も間もなく石松の所在を知ったが、そのまま預かって貰う事にした。

3. 少年時代を遠州で

石松が預けられた所は、森町で「新屋」と言う旅館を営んでいる中根安雄氏の7代前の『新寅』と言う人の家で、少年時代を14歳の頃まで育てられたという。

石松を預け、身軽になった助治は、そのまま炭焼きの稼業に精を出し、4・5年を経てかなりの蓄えも出来たので、故郷の掘切へ帰り再び百姓をする事になった。それには手間もないので近所の「幾」と再婚、二人の間に長女と三男の庄治郎(佐与吉ともいった)が生まれた。

その後、助治や庄治郎の家族たちまでは、掘切で生涯暮らしている。

その頃の石松は、体格もよく大人顔負けの力持ちである半面、乱暴者で些か持て余していた。

たまたま清水の治郎長が、兄弟分の森の五郎を尋ねて来た折、新寅の所へ立ち寄り、じっと石松の動作を見ていたが、「この小僧は見どころがある」と言ってもらい受け、清水へ連れて帰った。

4. 石松、頭角を現す

清水一家に引き取られ、大政、小政や先輩達にしごかれて、侠客社会に溶け込み、20歳を過ぎた頃には、清水一家の中でも頭角を現すまでになった。石松の叔父、稲吉庄右衛門応貞は仙台の人が編み出した愛宕流剣術、槍術、捕手術等の免許皆伝の達人で、弓術も日置流の奥義を極めた名士であったと言われている。

そのことを石松が「俺の叔父ごは滅法剣術が強いぞ」と言ったことから、母「かな」の兄、稲吉家32代目の当主、庄右衛門応貞は、他ならぬ甥の石松がお世話になっている清水治郎長の頼みとあって、一家の若い衆に剣術の指南をすることになった。

さすが治郎長が見込んだ通り、石松は生まれながらにして剣術の素質に恵まれ、めきめき腕前も上達し、治郎長の用心棒として無くてはならない存在となった。

以来、清水からは治郎長や代理者が明治5年頃まで、慶弔の挨拶に稲吉家を訪れるのが常であったとか、37代目当主、稲吉朔氏や身内の者も語った。